

# Hare の指令主義における言語行為論的適切性について

駒田 珠希 (Tamaki Komada)

北海道大学

本発表では、道徳文の発話を指令であるとする Hare (1961,1970,1997)の指令主義において、言語行為としての指令が適切に遂行されるための条件を、Austin(1955)の言語行為論における適切性条件を援用しつつ再構成する。結論としては、指令主義において指令が適切に遂行されるための条件は、大きく次の三つであるといえる。一つ目の条件は、道徳判断において判断者が用いている「よい」の判定基準が、客観的に存在する道徳原理と対応していることである。二つ目の条件は、道徳文が持つ記述的内容が真であることである。三つ目の条件は、当該の道徳判断が誠実に下されたものであるということである。

指令主義とは、道徳文は記述的要素の他に指令的要素を持つとするメタ倫理学上の立場である。この立場によれば、道徳文は「記述的意味 *descriptive meaning*」と「評価的意味 *evaluative meaning*」の二つの意味を持つ。前者は、事実に関する記述的な情報を伝え、後者は、記述的意味によって記述された対象や性質についての指令という言語行為として理解される。さらに、記述的意味については「判定基準的側面」と「記述的側面」の二つの側面に分けて考えることができる。判定基準的側面とは、判断者が対象を「よい」と判断する際の判定基準を示すものであり、記述的側面とは、実際に「よい」という語が用いられた際にその語が指している事実や性質の記述である。

例として、ある人が、優しくて寛容でトランプでずるをしない人物に対して「彼はよい人だ」と言った場合について考える。この場合の「彼はよい人だ」という発話の記述的意味は、判定基準的側面として「『よい』と判断する際の基準は〈優しくて寛容でトランプでずるをしない〉ことである」を示しており、記述的側面として「『彼』によって指されている人物は、実際に優しくて寛容でトランプでずるをしない」という事実を記述していることになる。さらに、この文の発話の評価的意味によって、「優しくて寛容でトランプでずるをしない」ということを指令することになるのである。

言語行為論の提唱者である Austin によれば、真偽はある言明を評価する際の尺度の一つに過ぎず、特権的なものではない。彼は、言明を正確に評価するためには真偽のみを重視するのではなく、全体的な発話状況をも踏まえた「適切性」の尺度も必要であると述べている。従って、道徳文の発話を指令という言語行為として捉える指令主義において道徳文を評価するためには、記述的意味と評価的意味のそれぞれに応じた評価方法を採る必要があると考えられる。つまり、その文が伝える記述的内容が真であることと、その文の発話において遂行される指令という言語行為が適切に遂行されることが必要であるといえる。

本発表では、特に道徳文の持つ評価的意味に着目し、言語行為としての指令が適切に遂行されるための条件を、Austin による適切性条件をもとに再構成する。Austin は、

適切性の条件として(A.1)から(Γ.2)までの六つを提示している。(A.1)、(A.2)の条件は、言語行為を遂行するための「一定の状況において一定の人物による一定の言葉の発話を含んでいる」受け入れられた手順が存在するか、また、その手順が発話者の自称通りに適用可能か、に関するものである。(B.1)、(B.2)の条件は、その手順に従う際の発話者の側の正確さ、完全さに関するものである。(Γ.1)、(Γ.2)の条件は、その発話が当該の言語行為を遂行しようとする意図に基づいたものか、発話後に期待される行為を行っているかなど、発話の誠実さに関するものである。

Austin によるこれらの条件に対応させて再構成した、指令主義における指令を適切に遂行するための条件は次の通りである。まず、Austin の議論における「受け入れられた手順」に関する条件(A.1)、(A.2)に対応するものは、指令主義において、道徳文が持つ記述的意味の「判定基準的側面」に関する条件として考えることができる。つまり、道徳判断を下す際に発話者が用いる判定基準が、歴史的・文化的に受け入れられた客観的な「道徳原理 moral principle」と合致しているかどうかに関する条件として考えることができる。さらに、Austin の議論における発話者の正確さと完全さに関する条件(B.1)、(B.2)に対応するものは、指令主義において、道徳文が持つ記述的意味の「記述的側面」に関する条件として考えることができる。つまり、記述的側面が担っている事実の記述が、現実世界を正確かつ完全に表したものであるかどうかに関する条件であるといえる。Austin の議論における誠実さに関する(Γ.1)、(Γ.2)の条件に対応するものは、指令主義において、当該の道徳判断が「引用符付き」あるいは「慣用表現」となっていないかどうかに関するものといえる。本発表では、これらの条件を満たす道徳判断が、指令主義において言語行為としての指令を適切に遂行できるものであることを示していく。

#### 【主な参考文献】

- ・ Austin, J.L. (1955) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press (邦訳『言語と行為 いかにして言葉でものごとを行うか』飯野勝己訳、講談社、2021)
- ・ Hare, R.M. (1961), *The Language of Morals*, Oxford University Press (小泉仰・大久保正 健訳、『道徳の言語』、勁草書房、2003)
- ・ Hare, R.M. (1997), *Sorting Out Ethics*, Clarendon Press
- ・ Hare, R.M. (1970), “Meaning and Speech Acts”, *The Philosophical Review*, Vol.79, No.1, pp.3-24